

すぎなみ大人“熟”してる？

J u k u s i t e r u ? T I M E S ' 1 3

平成25年12月7日発行

発刊元：塾熟出版（事務局）

東京都杉並区梅里 1-22-32(社会教育センター内) TEL 3317-6621 FAX 3317-6620

VOL.12

永福
だがしや楽校を開こう!

持ちより・分けっこ談義(分かち合いの体験学習)

12月2日
月曜コース

モノを媒介としたやりとりとは



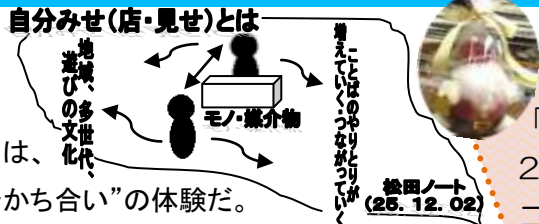
◆ゲスト講師は卒業生！

そして、だがしや楽校体験♪

初回から約1ヶ月空いての第2回目は、
だがしや楽校の根底の考えである“分かち合い”の体験だ。

今回は、ゲストの宮崎さん(左上写真)のお話を聴き、自分たちが永福でだがしや楽校を開く際のヒントを探ることから始まった。宮崎さんは、永福地域でだがしや楽校の実践を5年間続けている大人塾OG。「だがしや楽校でのお店、自分を見せる『自分みせ(店・見せ)』って、ほんとになんでもいいんです。例えば新聞・TVで観たことを“まずやってみる”。それだけで、まちの人と関われるのです。」

それでは今回のテーマである、“分かち合い”体験を、“まずやって”みよう！
前回、「何か自分を表すものをお持ちよりください」とお願いしたところ、自作ケーキ(下写真①)／旅行先のお土産／モミジやイチョウやドングリ、柿の葉(②)／一緒に作れるクリスマス飾り(③)／写真／押し花しおり／バルーンアート／タンポポ茶／鷹の爪などが持ちよられた。そこには、自分が好きなもの・得意なもの・できるものを通した「会話」が生まれていた。「旅行はどちらに行かれたのですか」、「このクリスマス飾り、私でも作れますか」。この「会話」は、“分かち合い”から生まれたものだ。



卒業生企画①

「リンゴサンタを作ろう！」11/22
24年度OGの山本さん企画。本物のリンゴでサンタづくりだ。参加した受講生からは、「自分の人生では触れることがなかったことができて良かった」という感想。

卒業生企画②

「永福まちある記」11/26
今回ゲストのOG宮崎さん企画。神社や博物館、商店街をめぐるコースだ。参加した受講生からは、「引っ越してきたばかりだったので、永福というまちを知ることができた」という感想。



◆だがしや楽校開催へのアイデア談義

これらの“分かち合い”を体験した受講生。それでは、まちなかで開催するだがしや楽校では、どうしたらよいだろう。後半は、ペアを変えながらアイデアを出し合うことになった。その中では、「実はオリジナルのケーキのレシピも作ってきたんです」、「そのレシピを大きく印刷してパネルにしたらどうかしら」といったお客さんを意識したアイデアや「おはぎは、こしあんでしょ!」、「いやいや、つぶあんも捨てがたい!」という好みのおしゃべりから、“おはぎの好み調査in永福”なるアイデアが生まれていた。(上写真④)

次回はさらに具体的な準備・話し合いの予定!(坂本)

コラム~コトバを語る

このコラムでは、講座に関連するキーワードについて経験や思い出、自分なりの定義を、受講生自身の言葉で語ってまいります。第1回目は、玉田さん。
キーワードは、【駄菓子屋】

「駄菓子屋がなくなる」: 近所の駄菓子屋「篠原商店」が、今年6月にその65年(!)の歴史を終えました。最終日は老若男女が店を取り巻き、たいへんな賑わい。卒業した学校がなくなるみたいな気持ちになったのでしょうか。

まちなかアート発見!

～自分の言葉でアートを語る
自分の足でアートを探す～



ツナガルシクミって何?

三角インタビューのツナガルシクミ

第3回目は、「ツナガルシクミ」をじっくり考える・・・がテーマ。何と云っても、今回の受講生は全員が「ツナガルシクミ研究部員」なのである!

まずは三角インタビューの発表。日沼さんと坂田さんが交代で、受講生の書いてきたインタビュー記事を読み上げた。<インタビューが記事になることの説明が足りなく、申し訳ありませんでした!>このインタビューの目的は、人を深く知るしくみを実践・実感してもらうためのもの。

自己紹介すれば簡単のところ、あえて「訊いて」

みる→「訊いている」ことを「聴いている」ことにより、他の人がどんなふうインタビューにしているんだろう?を知る→家に持ち帰り、「訊いたこと」を文字化することで新たな発見→全員の発表を聞いて他の人はこうなんだ・・・と発見。発見の嵐! ツナガル自己紹介、人はつながることで新たな発見が生まれる。



「ツナガルシクミ」展示会のツナガルシクミ

後半は、この講座の軸となっている「ツナガルシクミ」展示会に

ついて、中心で関わった日沼さんからのレクチャーとなった。(詳細は下記)。

「『表現する』ということは、アーティストだけのものではなく、私たちの中にあります。新しいものは関係性の中からはしか生まれません。対環境・対人・対物と自分。そこからどう広がっていくか。自分の身近なものを見つけて、つながってソーシャルなものにしていく。それを考えていきましょう。」と日沼さん。

今回の講座のメインテーマとなった「ツナガルシクミ」の元となった展示会には、お互いがお互いに影響し合ってきた3人のアーティストが、一番身近なつながりである家族と一緒に青森という土地で、木やねぶたなど青森の土地のものをつなぎ、新しい視点を獲得して作った作品があった。

受講生からの感想は「アートの新しい視点を発見」「つながる様子が分かった」という声と同時に「青森の来場者の反応はどうだったのか」という質問も。

自分の中のものを出し、身近なものをつながって新しいものを作っていく。私たちにもできる!(文章:湊)



展示会でのツリーハウス



↑日沼先生と坂田さんの楽しいトーク

4人グループになって感想を共有



国際芸術センター青森企画展 「ツナガルシクミ」

アーティスト・イン・レジデンス(芸術制作を行う人物を一定期間ある土地に招聘し、その土地に滞在しながらの作品制作を行わせる事業のこと)を実践している国際芸術センター青森が2010年夏に、藤 浩志さん、小山田 徹さん、高嶺 格さんを招き開催した展示会のこと。学生時代から現在に至るまでさまざまな場や人々を共有してきた3名が、三人三様の滞在制作を行いながら、各々の生活や表現活動をめぐる関係の連鎖「ツナガルシクミ(繋がる仕組み)」を視覚化し、それらの意味や価値とは何かを考え、深める試みを行った。



◆すぎなみ大人"熟"してる?の発行にあたって◆

この新聞は事務局スタッフの独断と偏見と多少の事実に基づき作成しております。